

釜石の歴史 ょもやま話

13

釜石の鉄学編(8)

問い合わせ
市世界遺産課

22-8846

釜石製鉄所の歴史(4)

田中時代の終焉

大正3(1914)年に始まった田中一次世界大戦は、経営不振だった田中製鐵所に活気をもたらしました。しかし、大正8(1919)年に終戦する

と、戦前以上の経営不振に陥ります。大戦中の物価の高騰により大正8年、全国各地で賃上げを要求する労働争議が多発し、ストライキに入ったものも500件近くにのぼりました。

辛亥革命(明治44(1911)年)やロシア革命(大正6(1917)年)、ドイツ革命、米騒動(大正7(1918)年)、といった民主化運動が日本にも広まってきたことが背景にあります。

大正8年6月に足尾銅山を中心に大日本鉱山労働同盟会が結成されると、11月にはその幹部が来釜し、永楽座(只越町)で大日本鉱山労働同盟会釜石支部が結成され、2200人ほどが会員となりました。そして18項の待遇改善要求を出しました。

この年の4月に横山久太郎から所長を受け継いだ中大路氏道は、18項のうち15項は承諾したものの、3項(下表の1~3)は拒否しました。これを不服とした同盟会は12月1日よりストライキに突入しました。会社側は事態収拾の糸口が見いだせず、柿沼竹雄岩手歩兵二個中隊、盛岡から工兵一個中隊県知事は軍隊派遣を要請し、青森から

が派遣され、憲兵35人、警官200人も動員されました。5日に会社側が処遇改善を約束し、6日より業務が開始されました。この間同盟会員300人が検挙され、支部長であった荒木田忠太郎など指導者62人も検挙されました。

製鐵所では労働争議の反省を踏まえ、労使相互の意思疎通を図るため大正9(1920)年、真道会を結成しました。また同年陸上大運動会も開催されました。この真道会が釜石のスポーツや文化芸術の振興に大きく寄与することになります。

釜石製鐵所は銑鋼一貫製鐵所として鉄鉱石から銑鉄を生産し、それを鋼鉄にする工場でしたが、鋼鉄生産に比べ銑鉄生産が多く、アンバランスな生産体制でした。戦後恐慌下、政府は銑鉄や鋼鉄の価格の下落に対し、鉄鋼産業の保護政策として銑鉄には補助金の交付をしたもの、銑鉄には交付が無く、インド銑などの安価な銑鉄が流入したため、さらに経営は圧迫、設備面の合理化や人員整理など行いましたが、効果はありませんでした。従業員への給与も遅配が続き、鋼材を大阪で売りさばき、そのお金で副社長の田中長一郎がリュックに詰め仙人峠を越えて釜石に運んできたエピソードも生まれました。追い打ちをかけるように大正12(1923)年9月1日関東大震災により本社を焼失、ついに経営が立ち行かなくなりました。

常務取締役の香村小禄は三井鉱山株式会社社長の牧田環に「釜石肩代わ

り」を要請し、大正13(1924)年3月、譲渡の契約が交わされました。明治20(1887)年の創設以来、37年間で田中時代の幕は閉じ、新たに釜石鉱山株式会社として再出発を図ることとなりました。

労働8時間制(当時は12時間)
賃金15割増額
食料米改善及び価格を20銭低減
衛生設備改善
電気課職工に被服給与
救済会基金引渡
長屋家賃の無料
電燈料の無料
湯屋湯銭の無料
公休日勤務者に賃金倍額支給
賃金支払日の一定
退職及び勤続手当の支給
附属病院の現金制度廃止
酒保の物品減価販売実施
中妻長屋付近に米味噌等引渡所の設置
工場内危険防止設備の改善
労働者の人格の尊重

18項の要求

1817161514131211109 8 7 6 5 4 3 2 1



荒木田忠太郎が釜石の労働争議についてまとめたもの

田中長兵衛・横山久太郎の銅像
田中長兵衛・横山久太郎銅像建立記念はがきより



田中長兵衛・横山久太郎銅像建立記念はがきより



高村光太郎文学碑
現在、グリーンベルトの浜町側の入口に設置されています

の金属回収令により撤去回収されました。現在、釜石製鐵所の本事務所前にある両氏の胸像は、昭和25(1950)年10月、釜石線開通にあわせて設置されたものです。

この銅像は昭和18(1943)年の金属回収令により撤去回収されました。現在、釜石製鐵所の本事務所前にある両氏の胸像は、昭和25(1950)年10月、釜石線開通にあわせて設置されたものです。

員全員に1日分の賃金を寄付させたにもかかわらず、除幕式には役員と組頭級のみが招待され饗應を受けました。が、他の労働者は記念の手ぬぐいを渡されただけでした。これが、労働争議の火種の1つになつたとも言われています。

